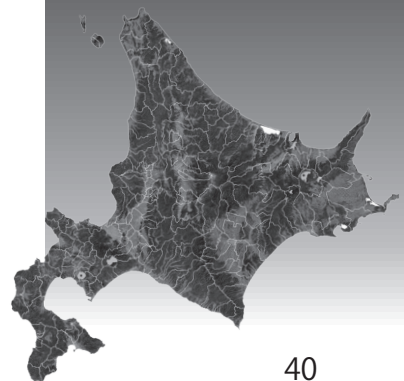


# 経営と健康

第1回

## 北海道名付け親・松浦武四郎

講談師 一龍齋貞花



て生れ、今も生家が残されています。

子供のころから実に強情で、いたずらをするときよく土蔵に入れられたが、父の桂介が許すと言っても中々出てこない。揚句の果て積んである米俵に平気で小便をひっかける。

十五歳の時、藤堂公に講義している儒者の平松樂齋の塾に入門、論語を学ぶとともに、樂齋のもとを訪れる諸国の有名な学者に接し、話を聴くうちに、「聞くだけではいけない。先生たちのように自分の目で確かめ、学問を深めたい」

十六歳の時、親に内緒で家を飛び出し江戸へ向かい、平松塾で知り合った神田お玉ヶ池の漢学者山口遇所のところへ転がり込み、遇所は篆刻家としても有名で、見よう見真似で篆刻の技術を覚え、これがのちに諸国を旅する際糧を得る手立てになりました。

「まず仕事を探さねば」と、親戚を

訪ねたため、すぐ親元に知らされ、家へ帰らざるを得ませんでした。

武四郎は、一メートル四〇センチぐらいと小柄ながら筋肉質でたくましく、実に健脚で、伊勢へ戻る時、中山道五十九次、途中戸隠や御嶽山に登りながら十六歳の少年がわずか十三日間

で伊勢へ。  
「父上、旅に出たいと思います」  
「無断で家を飛び出し、あれほど心配させておきながら、一体何を考えているんだ」

「私は六番目の子どもです。家は兄さんが継いでくれます。農民が土地にしがみついて暮らす日はやがて終わるような気がします。己の道を立てるには座して書物から学ぶばかりではいけないと思います」

「路銀も無しに旅は出来まい」  
「路銀は旅で稼ぎます。奉公もしま

す。いささか篆刻も覚えました」

「お前の名前など、この村を一步出たら誰も知るまい。印を彫るだの、書画というものは、世間に名を知られてこそ金になるというものだ」

「名を知られた人達にも、無名の時代はありましよう。これから身を立てようとするには、まず諸国を知ることです。米や着る物、住む家もすべて庶民の力で出来るものです。旅には生きた学問があります。人が人を知らずして、なんで人の道を全う出来ましよう」  
すごい精神力、志です。

流石の父も根負けし、十七歳の若者のこと、すぐ困って戻ってくるだろうと渋々承知。

しかし、これが両親と今生の別れになろうとは、武四郎も予期出来ないことでありました。

蝦夷が北海道となって百五十年、北海道名付け親松浦武四郎にスポットが当てられています。二十三年前、松浦武四郎を口演した時、全くといってよいほど知られていませんでした。アイヌ人に寄り添い、樺太から北方四島も探査。現在の北方領土問題、人種差別も見えてきます。武四郎にお付き合いください。

北海道の名付け親、松浦武四郎は、文政元年（一八一八）二月六日、伊勢の国須川村、現在の三重県松阪市で苗字帯刀を許されている庄屋の四男とし

諸国への旅に出立

天保五年、父がくれた饒別の一両を懐に、京都から大坂へ。無名の武四郎など相手にしてくれない学者が多い中に、大塩平八郎だけは、

「暫く滞在してはどうじゃ」

「有難うございます。でも私は各地を旅したいと思います」

もし大塩塾に滞在していたら、三年後、飢饉で飢えに苦しむ人々を救おうと立ち上がった、大塩平八郎の乱に巻き込まれていたかもしれません。

大坂から兵庫、岡山、四国、そして淡路島から紀州熊野権現に参拝。さらに高野山から和泉（大阪府）南朝の古跡を廻り、北陸から飛騨、美濃、三河、信州、甲斐に入り身延山に参詣。初めて富士山に登り、八王子から江戸へ。つてを頼つて天保の改革をした老中水野越前守忠邦の屋敷に奉公したが、わずか三日で奉公に失敗。シヨックで頭を丸めたほど。

「自分には、一個所に奉公など叶わぬことであつたか」と、己を悟り再び旅に。日光、白河、仙台、松島を巡り、なんだか地図を片っ端から申し上げて

いるようですが、やがて長崎から吉岐、対馬へと。

講談がいかにも早いか、北から南へ一辺に飛んじやつた。

長崎の名主津川蝶園を訪ね、当時日本で只一個所の国際貿易港、奉行所で漂流民の口述書を代筆したりする役目で情報も早く、実に博識な老人。

「武四郎さん、蝦夷地がオロシヤに狙われていることをご存知かな。

明和八年、カムチャツカに流刑になっていたハンガリー人フオン・ベニヨフスキーが脱走し、マカオに向かう途中、長崎のオランダ商館長宛に、ロシアの南下を警告、カピタンはただちに幕府に伝えたが、幕府はこれを黙殺。それから七年後、シベリヤの商人が根室近くまで来て、通商を求めたが、松前藩は『外国との交易は国禁でござる』と退けた。当時蝦夷地を松前藩は米が獲れないため、鮭、ニシン、昆布など海産物で藩財政をまかなっていた。

請負人や役人は、原住民のアイヌ人をだましてうまい汁を吸っておったのじゃ」

慶長九年（一六〇四） 松前藩はアイヌの人たちが保存している干鮭百匹を

米二斗と交換していたが、七十六年後米の高騰を理由に百匹に対し一斗二升に引き下げ、米の値段が安定した後も元に戻さず、天明二年（一七八二）には、八升まで引き下げ、わずか百八十年ほどの間に60%も交換量を減らした。松前藩は、シベリヤの商人が通商を求めてきたことを幕府に報告しない。

幕府から巡察使が来れば官官接待。幕府は松前藩に任せっぱなしで実態が判らず、藩の役人たちは請負人の商人と結託して私腹を肥やす。

ロシア人は、ラッコ漁のため千島列島に小屋掛けして、アイヌの人達ときちんと交易していた。

自由な交易で豊かな財産を築いていたアイヌ民族に対し、松前藩は、労働力の確保と、交易の利益を独占するため、自由な移動を禁止、交易を制限。

漁場の経営を商人に請け負わせ、「運上金」という名目の税を収めさせ、こうした厳しい政策により、アイヌ民族の人口は減少。

ついにアイヌの人々が立ち上がり戦となったが、松前藩は事態の鎮圧にあ

たる一方、和解と見せかけ酒の席についたアイヌの指導者を毒殺したり、アイヌ同士で仲間割れを起こさせるなど、完全に服従させ、男は強制労働に駆り出し、女は和人の妾にするなどやりたい放題。

幕府が、本格的な調査隊を送つたのは宝暦八年（一七五八）、山口鉄五郎以下三十二人を派遣。この中に最上徳内があり、二班に別れて二年掛かりでクナシリ、エトロフ、ウルップ島、樺太のクシュナイまで。日本人がこれほど奥地に入ったのは初めてとは言え歩きやすい道を通つてのこと。

寛政四年（一七九二）ロシアの女帝エカテリーナ二世が、国交を求め使者のラクスマンが、伊勢の漂流民光太夫を伴い根室へ。その後エゲレスなどが薪や水を求めて蝦夷地を訪れる。

寛政十年（一七九八） 幕府は二百人近い大巡察隊を派遣。別動隊に近藤重蔵を中心とする一隊もあり、重蔵は北海道開発の基礎を築いた人と言われる一方、アイヌの人々から搾取した人とも言われています。

蝶園老人から蝦夷地の変遷を聞いた武四郎が、北の大地に旅立つお話は次回連続に申し上げます。パパン